

近衛信尹筆「檜原いろは歌屏風」に関する考察

浜野 真由美(大阪大学)

永観堂禅林寺に伝来する「檜原いろは歌屏風」は、「檜原図屏風」と「いろは歌屏風」の二隻からなる紙本墨画墨書の六曲一双屏風である。両隻の書はともに近衛信尹(1565～1614)筆と見做され、大字仮名の嚆矢として日本書道史上重要な位置を占めるが、そうした知名度に反し、実証的な考究はほとんど進められてはいない。近年「檜原図屏風」の画については長谷川等伯(1539～1610)筆に比定されたものの、「いろは歌屏風」の簡略な画は閑却されており、また、両隻には内容的にも関連性が見出せないとの指摘から、現在では本来別個の作であるとする見方が強い。

本発表では、まず二隻の現状と伝来を明らかにする。「檜原図屏風」は、熟考された構成と鏝度の高い筆致から、慎重な制作状況が推察される。対して「いろは歌屏風」は、第一扇～第三扇は後補である可能性が高いが、当初とみられる第四扇～第六扇の墨垂れと軽妙な筆致から、むしろ即興的な制作状況が推察される。こうした相違に鑑みれば、確かに二隻は別個の作である蓋然性が高い。

ところが、『禅林寺年譜録』の元和9年(1623)の項、すなわち禅林寺第37世住持果空俊式(?～1623)没年の項に「伊呂波屏風一双ナル」の記述が見出され、信尹と懇意であった果空上人の在世時に二隻が一双屏風として禅林寺に伝来したこと、つまり制作後ほどなくより一双屏風であったことが判明する。となれば、二隻に何らかの関係性が伏在した可能性も否めない。

そこで両隻の書画を再検討すると、画のモチーフはほぼ同じ位置に配され、書の字形や章法も近似する箇所が多いなど、意外な親近性が見出される。ことに、「いろは歌屏風」の終行「(前三々後三)々」の踊り字にあえて用法上の誤りである「くの字点」を用い、「檜原図屏風」の終行の「(ふ)く」と同じ形状の字で書き終えることは、「檜原図屏風」を意識しつつ「いろは歌屏風」を制作した可能性を示唆する。こうした二隻の関係から、先行する「檜原図屏風」に即興的に制作した「いろは歌屏風」を加えて一双とした、という成立事情を想定することができよう。

さらに、「檜原図屏風」に表出された三輪地方が柿本人麻呂(660～720?)に縁深い地であることから、その主題は人麻呂の鎮魂にあるとの推察が可能であり、一方「いろは歌屏風」の主題はいろは歌の諸行無常観にあると考えられる。近年の和歌研究においては、人麻呂の歌にいろは歌と諸行無常偈を併記して解釈するといった、和歌文学における仏教的付会の傾向が指摘されており、二隻は内容的にも関連性を認めることができる。

なお、こうした書画の理解には和漢の文芸や仏教理念に関する知識が必須であろう。現段階では推察の域を出ないが、二隻の享受者が公家や五山の禅僧ら知識層、さらに言えば、当該期に盛行した和漢聯句や連歌の連衆であったという可能性も提起したい。